



Tierney Jr. LM先生来院記

総合診療科・医師教育研修部長 福岡敏雄

2007年11月16日、Laurence M Tierney Jr.先生が倉敷中央病院に来院されました。Tierney先生の紹介と、来院の経緯、来院時の様子について記したいと思います。

Dr. Tierney (ティアニー)とは

Dr. Tierneyは、米国サンフランシスコの退役軍人病院で30年にわたって臨床医として診療や教育・指導にあたってきました。そして、カリフォルニア大学サンフランシスコ校で教育スタッフとして抜擢され、内科学の教授となり、教育者として高い評価を得てきました。毎年改訂される内科系教科書の「Current Medical Diagnosis and Treatment」の編者を長く務めています。

特に、鑑別診断の実践と教育・指導の評価が高く、米国のたくさんの大学・教育病院から教育スタッフとして招かれています。教育手法として、実際の症例の診断プロセスをディスカッションする検討会、回診を実践してきました。この実績は米国でも高く評価されており、New England Journal of MedicineのClinical Problem Solvingシリーズをいくつか執筆しています。2001年には、退役軍人病院協会から、最も栄誉のある賞の1つであるDavid M. Worthen Award for Academic Excellenceを授与されました。日本では、彼を招聘した経緯と実績が「大リーガー医」に学ぶ 松村理司著(当時舞鶴市民病院副院長、現：洛和会音和病院院長)という本で紹介され、注目を浴びるようになりました。現在も音和病院には年に1回、2-3週間程度来院しています。



Dr. Tierney

倉敷中央病院に來たいきさつ

私は2006年11月の1か月間、京都市山科の洛和会音和病院で教育・指導スタッフとして勤務し、そのうち2週間がTierney先生の教育期間と重なっていました。そこで、彼のレクチャーや症例検討会を間近に見る機会があり、私が次の病院に採用されたらぜひ来院してほしい、と提案したところ、すぐに請け負ってくれました。しかし、来院日程を詰めているときに、すでに他の予定が入っていて、来院は非常に困難なことがわかりました。ほぼあきらめていたところ、11月になって本人が来日してから電話があり、半日という短時間ではあるものの、倉敷中央病院に行きたい、と申し出てくれました。

倉敷中央病院で何をしたか

来院決定から当日まで、わずか1週間でした。まず、救急外来でのカンファレンスと、ICU回診、内科系診療科でのケース

カンファレンス、ランチタイムセミナーという流れを設定しました。また、内科系診療科として、神経内科のカンファレンスに参加することになりました。ランチタイムレクチャーとしては、終末医療の問題を話してもらうことにしました。

ここで、うれしいことがありました。救急外来でのカンファレンスを考えていたところ、毎週第2水曜日のJ2による救急症例検討会の担当者(J2の岩本先生、小畑先生)が、英語でのプレゼンの準備をしてくれました。Tierney先生は大喜びするに違いありません。急遽、当日朝から大原記念ホールで症例検討会を行い、その後、ICUと神経内科病棟での回診、最後にまた大原記念ホールに戻りレクチャー、という流れになりました。

<来院スケジュール>

8:30- 9:45	救急症例検討会：当院J2小畑先生と岩本先生によるプレゼンテーションと、ディスカッション
9:50-10:50	集中医療センター回診：ICU入室患者のベッドサイドディスカッション
11:00-12:00	神経内科症例カンファレンス：症例検討＋回診(Tierney先生自ら診察もされたうえで、ディスカッション)
12:15-13:00	ランチタイムレクチャー 「End-of-Life Care in US:Physician's perspective」 終末期医療の現状を米国での経験を踏まえ、医療技術の進歩と患者側の価値観の多様化とをどうすり合わせるかについて、コメントをいただきました。
13:15	倉敷駅へ

Tierney先生は何を感じたか

まず、とても喜んでいました。ジュニアレジデントとの症例検討が特に気に入ったようでした。さらに、来院中に提示された症例がいずれも興味深かった、と感心していました。大変あわただしく、昼食時間もないスケジュールでしたが、ゆっくりしたわかりやすい英語をしゃべりながら、終始笑顔で過ごしていました。2008年の再会を約束してくれました。

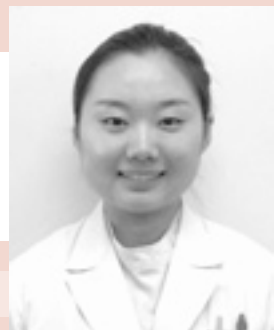
今後の予定

2008年も招聘する予定で、今回より長期の在院をお願いしたいと考えています。かなり忙しい方なので、早めに詰めてゆき準備をしていきます。そして、レジデントに限らずもっと多くの先生方に、Tierney先生の知識や技術、人柄などを見ていただきたいと思っています。

謝辞：今回の来院は、洛和会音和病院院長 松村理司先生、洛和会京都医学教育センター 酒見英太先生の協力・支援で可能になりました。

神経内科症例プレゼンテーション

患者情報は、その人の生活をイメージして積極的に聞いていく



教育研修部 J1 権 淳美

定例の神経内科カンファレンスで、大井主任部長が「CMDTのTierney先生が今度来院されるので、神経内科の回診に参加していただくと思う」と発表されました。回診には、同意を得た上で、重症筋無力症の症例ともう1人の患者さんが選択されました。私は、神経内科医ではないTierney先生が、いったいどのような感じで診察をされるのか、とても楽しみにしていました。

当日は、まず担当のシニアの先生が症例のプレゼンテーションを行い、Tierney先生がいくつか質問をされた後に、患者さんを別室で診察する流れで進みました。重症筋無力症の患者さんについてのプレゼンテーションを聴かれて、Tierney先生は、最初にどのように鑑別していくか、脳から筋肉に至るまでの神経の走行の図を描かれました（大脳皮質 脳幹 脊髄 末梢神経 神経筋接合部 筋肉）。この部位はこうだから病気の原因部位とはなりえない、ここは可能性があるね、などと楽しそうに鑑別診断プロセスを披露してくださいました。これが非常に

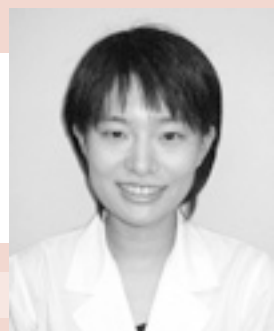
勉強になりました。

続いて、患者さんをひと通り診察されて、「これはtext book caseのようにきれいな重症筋無力症だ！」と診断されました。そして「これからwallet biopsyをしてみよう」と、患者さんに運転免許証をお持ちいただきました。その写真には、なんともう眼瞼下垂がみられており、実は夏に免許の更新をしたとき、すでに目の違和感があった、という新たな事実が見つかったのです。患者さんについての情報は、あらゆるところから得るチャンスがあり、それを見逃さないように、その人の生活をイメージして、積極的に聞いていくのが重要なだと学びました。次の患者さんでも同じように診断を進めていきました。

一貫して感じたのは、Tierney先生が常に楽しそうに診察されていたことです。今後経験と知識を蓄えて、このように症例一つひとつをわくわくしながら診ることが出来るようになったら、と思えた回診でした。このような機会を与えてくださった福岡先生、大井先生、スタッフの方々に感謝いたします。

英語症例プレゼンテーション

想像力を膨らませ、論理的に思考するため日々、鍛錬を



教育研修部 J2 岩本さやか

私が今回のお話をいただいたのは、Tierney先生の来院が約1週間後に迫った頃でした。同月予定されていた救急症例検討会での発表症例を、英語でプレゼンテーションしては、とのことでした。一旦引き受けはしたものの、英会話能力にあまり自信のない私は、実際のところ、引き受けたことをかなり後悔していました。短い準備期間はあっという間に過ぎ、当日を迎えることとなりました。

実際にお会いすると、事前に伺っていたとおり、笑顔の絶えない素敵な先生でした。ユーモアを交えた会話、気さくな先生の人柄で、一気に会場が温かい雰囲気に包まれます。私は、不明熱の精査目的で当院に紹介搬送された1症例をプレゼンテーションすることになっていました。いよいよプレゼンテーションが始まります。

「症例は90歳男性、施設に入所中」と現病歴のところまで即座に結核の可能性を指摘された時には、これ以上プレゼンテーションする必要はないのでは、と一瞬思いました。発表の後、最初の現病歴に戻り、その段階で得られる情報、そして予想し得る病態を鑑別診断リストに従って整理し、一つひとつ丁寧に、かつ、とても楽しそうに解説されます。雑多な情報から必要な

ものを見抜き、一つの結論へと導いていく思考段階のプロセスに圧倒されました。

Tierney先生の鑑別診断分類リスト

- ✓ Vascular : 血管病変
- ✓ Infection : 感染症
- ✓ Neoplasm : 腫瘍
- ✓ Toxic-Metabolic : 薬剤・代謝・内分泌など
- ✓ Autoimmune : 自己免疫疾患 アレルギー疾患
- ✓ Trauma-Degeneration : 外傷・変性疾患
- ✓ Congenital : 先天性疾患
- ✓ Iatrogenic : 医原病 医療行為の合併症
- ✓ Idiopathic : 特発性

今回、Tierney先生から教えていただいたこと、それはとても一言では言い表せません。特に強く感じたのは、救急のような緊迫した場面であっても、得られた情報から想像力を膨らませ、筋道を立てて緻密に考えられるかは、日々の鍛錬にかかっているということです。今回のことを自分の中で一つのステップにして、何か行動に移したい、そう思える貴重な機会でした。